

【平成31年研究発表会発表記録】

写真で見る昭和40年7月3日球磨川大水害時の旧坂本村

つる詳子¹⁾*

1 自然観察指導員熊本県連絡会 〒866-0073 八代市本野町463-6

I はじめに

昭和40(1965)年の梅雨後期には、活発な停滞前線の活動によって6月28日ごろから雨が降り続き、7月2日の夜半ごろから球磨川流域では豪雨となり、いたる所で川がはん濫した。人吉市では市街地が浸水し、20数戸の家屋が流された。人吉水位観測所では計画高水流量(4,000 m³ s⁻¹)を大幅に上回る水位を記録し、青井阿蘇(あおいあそ)神社楼門では基礎石のところまで水が押し寄せる大洪水となった。八代市では萩原橋下流右岸の堤防前面が崩れて4戸の家屋が押し流され、前川(まえかわ)堰も損傷した。また、水無(みずなし)川のはん濫等により、八代市内でも浸水被害が発生した。川辺川流域でも家屋の流失、橋梁流失などの被害が相次いだ。流域市町村全体では、家屋の損壊・流失1,281戸、床上浸水2,751戸、床下10,074戸に及ぶ甚大な被害が発生した¹⁾。

この大水害では、急激な水位上昇や大量の土砂流入など、過去の出水時には見られなかった現象が起きた。そのため、3つのダム(市房ダム、荒瀬ダム、瀬戸石ダム)が連携することなく放水したことが原因となったのではないかという声が、流域沿いの多くの住人からあがった。その因果関係に関する論議は別紙に譲ることとして、本報では、球磨川と油谷川の合流点付近に位置する旧八

代郡坂本村(現八代市坂本町)において撮影された写真や実際の体験者から聞き取りをもとに、当時の水害がどのようなものであったのかについて概説する。また、これらの記録から、球磨川流域において洪水に備えてきた昔の暮らし方についても概観する。なお、本報で使用する大水害の写真は撮影者(故人)のご家族から託されたものであり、関連した記事を、「くまがわ春秋」にも2017年9月号から3回連載で掲載している^{2,3)}。ご関心のある方は是非参照されたい。

II 坂本地区の家屋の水害時と水位低下後の比較

十条製紙の近くにあった坂本地区は、旧八代郡坂本村(現八代市坂本町)の中心として栄えた(図1)。昭和40年水害当時は、球磨川、油谷川およ



図1 昭和40年頃の八代郡坂本村坂本地区(現八代市坂本町)

*Corresponding author: e-mail: tsuru-shoko89314@hiz.bbq.jp

び十条製紙への引き込み線に囲まれた地域と、球磨川と国鉄肥薩線間の道路沿いに、多くの家屋が集中して、郵便局や役場等の公共施設、商店や旅館の多くもここに集まっていた。それ以前も、球磨川の舟運が盛んな時は、人吉と八代を結ぶ川のルートと、肥後峠を越えて下ってくるルートが交わる交通の要所として栄えてきた場所であった。球磨川の豊かな水量を利用する製紙会社が明治31(1898)年に操業を始めると、物資の集散が盛んになり、人々の往来や人口も増加し、都市型の集落を形成するようになった。

1. 球磨川と油谷川の合流点付近

球磨川沿いの道路は、現在はほとんどの場所で嵩上げされている。しかしながら、球磨川と油谷川の合流点付近の油谷川には鉄橋が架かっているため、道路の嵩上げができず、現在でも坂本地

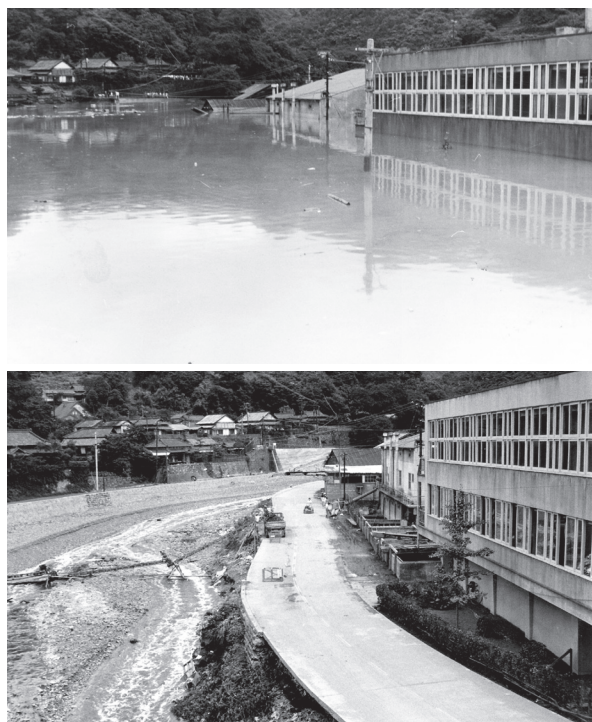


図2 油谷川に架かる鉄橋から見た球磨川合流点付近の様子(上:7月2日午前9時頃、右側の建物が坂本会館、下:水が引いた後)

区でももっとも低い場所であり、時々道路が冠水する。この球磨川と油谷川の合流点付近には、当時坂本会館が建てられていた。洪水発生時には、同会館2階まで冠水し、対岸の川沿いの家々も屋根がやっと見えている状態となった(図2)。

2. 坂本会館裏(東側)の集落

坂本会館の裏に続く階段から集落の様子を撮影した写真である(図3)。浸水時の写真では、右手の壊れた屋根の下に「キリン」と読める看板があり、酒屋であったと思われる。水が引いた後の写真では、この家屋はすでに撤去されている。左手には、旅館や薬局があった。「テレビはナショナル」という看板も見え、電気屋があったようである。

3. 坂本会館裏・階段から南側の集落

坂本会館の裏階段を挟んで、当時、酒屋、そ

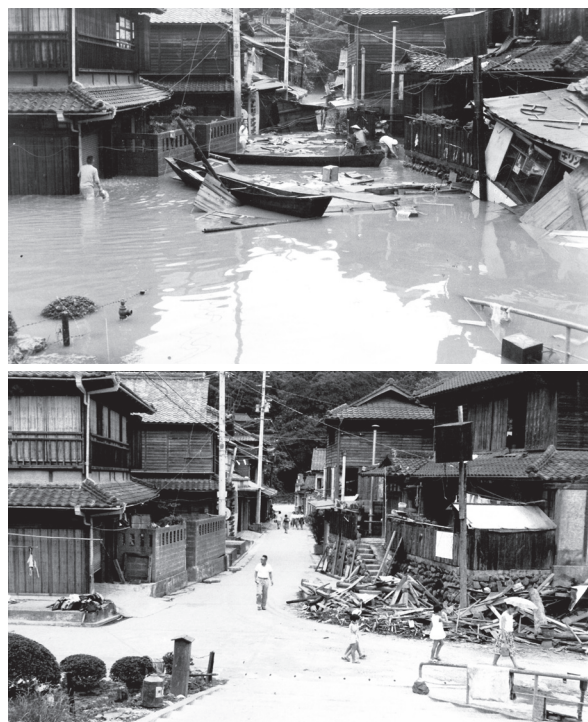


図3 坂本会館の裏(東側)の階段から見た集落の様子(上:7月2日水害発生時、下:水が引いた後)



図4 坂本会館裏の階段から南側の集落をみた様子（上：7月3日洪水発生時午前10時頃，下：水が引いた後）



図6 肥薩線の線路から十条体育館裏の病院（左）と民家（右）を見た様子（上：7月3日洪水発生時午前10時頃，下：水が引いた後）



図5 油谷川と球磨川の合流点近くで、肥薩線の線路沿いの場所（上：7月3日洪水発生時午前9時30分頃，下：水が引いた後）



図7 坂本駅前の道路沿いの家屋の様子（上：7月3日洪水発生時午前11時頃，下：水が引いた後）

の西側にキャンディ屋、その前には大和タクシーがあった(図4)。この場所は、水害の被害がもっとも酷かった場所の1つで、洪水時には裏手の石垣の上まで水が来ていたことがわかる。水が引いた後の写真では、この石垣前の倒壊した家屋は、すでに片付けられていた。

4. 球磨川に面する肥薩線の線路沿いの場所

球磨川と油谷川の合流点付近で、球磨川に面する線路沿い場所に数軒の家があった(図5)。浸水した家屋の左側は民家、右側は旅館で、ともに2階建てであった。「わずかな荷物を持って、着の身着のままで線路に逃げるのがやっとというくらい水位上昇が早かった」という地元民の話に頷ける写真である。ほぼ最高水位の状態と思われる。

5. 十条体育館裏の住宅

油谷川沿いの球磨川との合流点に近い場所に十条体育館があり、その裏側には2階建ての病院と民家があった(図6)。これらの建物の1階部分はほぼ冠水し、すぐ横の肥薩線の線路のぎりぎりまで水位が上がっていた。この線路に避難している人の様子から判断すると、通学や通勤の途中で洪水に見舞われたと推測される。

6. 坂本駅前の道路沿いの家屋

坂本駅前の道路は、現在の県道中津道一八代線とほぼ同じところにあった。ただし、現在は数メートル嵩上げされている。洪水に備えて、ほぼすべての家屋が2階建てとなっていたが、2階まで水がくることはなかった。この洪水時には、これらの建物は2階の屋根まで冠水した。電線に引っかかったゴミからも、洪水時の水位の高さが分かる(図7)。また、駅前の道路には人の身長程の堆積物が残り、家の中まで押し寄せた。これ

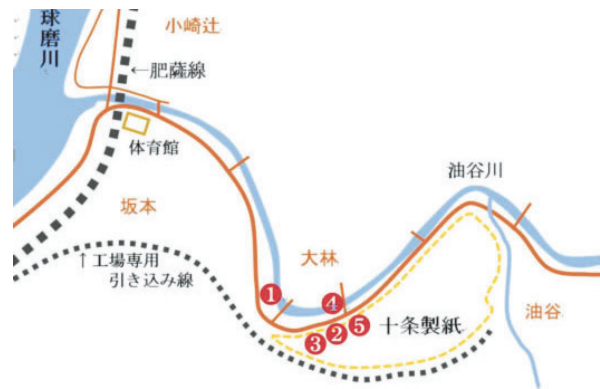


図8 昭和40年頃の八代郡坂本村坂本地区(現八代市坂本町)と隣接する十条製紙の工場

は、ダム建設前にはなかった現象で、洪水が起こるたびにこの堆積物が被害を大きくした。水が引いた後の写真では、家の中から泥を掻きだしている人が写っている。

III 十条製紙工場周辺の水害時と水位低下後の比較

昭和40年当時、前述のように、坂本村の中心部は、球磨川と油谷川の合流点付近の坂本地区にあった。ここには旅館や商店が集まり、油谷川沿いには、豊富な球磨川の水量を利用して西日本製紙の工場(現在はワイワイパーク)や工場勤務者の住まいがあった。油谷川にはいくつもの橋が架かっていたところからも、対岸の集落とこの製紙工場との深いつながりを窺い知ることができる(図8)。この坂本地区は町の中心部でありながら、洪水がとて多いところだった。現在の坂本駅付近が年に1度床下浸水するような時でも、ここは年に5~6度の床上浸水が起きてきた。ましてや、坂本駅周辺が床上浸水するような時には、天井まで来るような浸水があったという。それでも、この地区に家屋が集まってきた。次頁には、前述の昭和40年7月2日に起きた洪水時の十条製紙工場周辺を撮影した写真を紹介する(図9~12)。



図9 油谷川と十條製紙工場（上：7月3日午前9時撮影，下：水が引いた後）

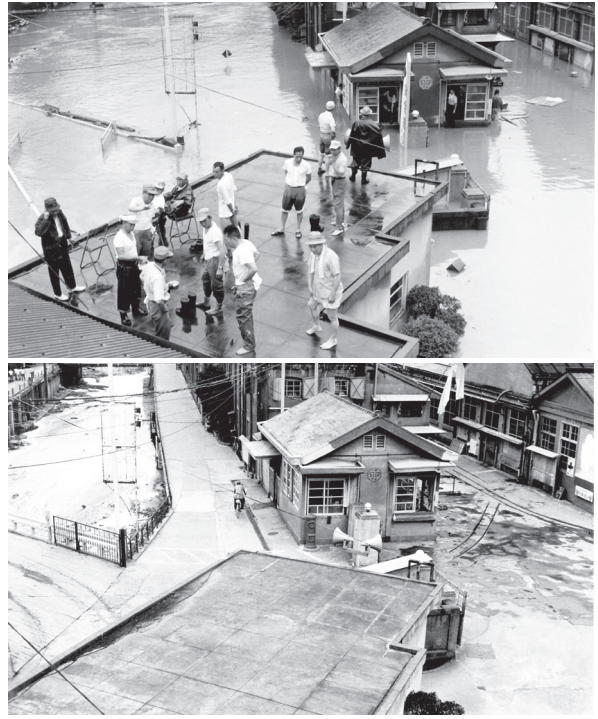


図10 十條製紙工場守衛室（上：7月3日午前8時30分頃，右：水が引いた後）



図11 十條製紙正門前の道路（上：7月3日午前8時30分頃，下：水が引いた後）

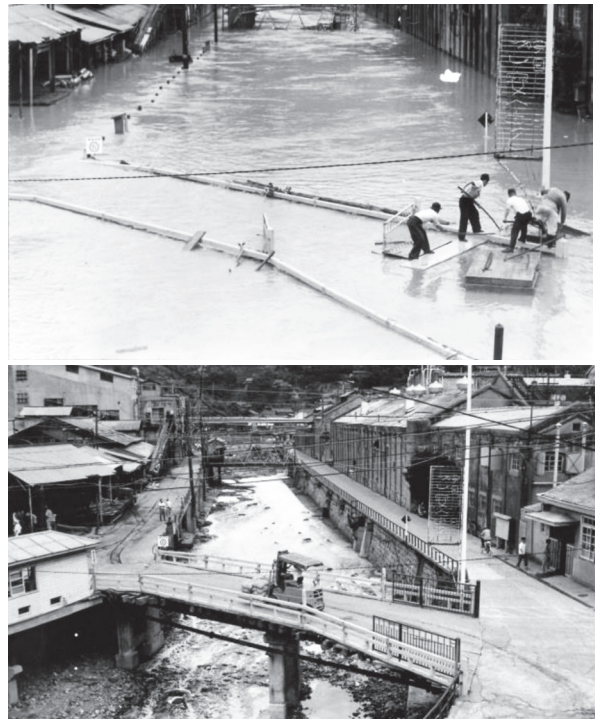


図12 十條製紙正前の油谷川と橋（上：7月3日午前9時30分頃，下：水が引いた後）

IV 写真から見える流域の暮らしと洪水の実態

1. 昔の坂本地区は、洪水に備えてほとんどの家が2階建てであった。
2. 昔は、今の道路より低い場所や、川のぎりぎりのところに、家や旅館を建てて暮らしていた。
3. 昭和40年7月3日の洪水では、肥薩線は冠水しなかったが、坂本中心部は場所によって違うものの、ほぼ全戸の1階以上が浸水する洪水であった。
4. 同洪水では、川の水位が急激に水位が上がり、人々は洪水に対処する間もなく避難した。
5. 同洪水では、水が引いた後にはおびただしい堆積土砂が残され、家屋の中まで押し寄せた。
6. 同洪水では、一番水位が上がったと予想される時間は、十条製紙の職員の出社後または通勤・通学の時間帯で午前9時前であった。
7. この頃の洪水発生時には、流木の流入はまったく見られない。

付記) この原稿投稿にあたって

球磨川流域の住民は、古来より度々の洪水に遭いながらも、個々の工夫や知恵、集落内の助け合いによって、リスク軽減を図りながら、球磨川の恩恵も余すところなく受けてきた。ダム建設前は、洪水は起きて「水害」がなかった。洪水時の濁り救い（アユ捕り）が楽しみだったという声は、流域の多くの方から聞かれた。本流のダム建設後、ダムの治水効果への期待で、水害のリスクに対する工夫は忘れ去られていく半面、流域住民はダムの限界と放流時の怖さも幾度となく体験した。

2018年7月の西日本豪雨の災害を機に、我々は再度水害と対処法について、根本から考え直す必要に迫られている。球磨川流域においても、昭和40年7月3日の水害をはじめ、多くの水害の

経験を忘れずに、後世に伝えていく必要があると痛感している。本報に掲載した写真が、今後の治水の在り方を考える上で参考になれば幸いである。

V 引用文献

- 1) 国土交通省八代河川国道事務所ホームページ。過去の洪水。昭和40年7月洪水。(URL: <http://www.qsr.mlit.go.jp/yatusiro/river/kouzui/index.html#1>, accessed on 7 March 2020)
- 2) つる詳子 2017. 球磨川大水害の記録①. くまがわ春秋 18: 12-15.
- 3) つる詳子 2017. 球磨川大水害の記録②. くまがわ春秋 19: 14-19.